

主 論 文 要 旨

報告番号

甲 ㊦ 第

号

氏 名

佐 渡 充 洋

主 論 文 題 名

Predictors of repeated sick leave in the workplace because of mental disorders
(職場において精神疾患が原因で休養した労働者の再休養の予測因子に関する研究)

(内 容 の 要 旨)

精神障害は社会に多大な損失をもたらす。先行研究の結果から、労働生産性損失が社会的な損失の中でも最も大きな比率を占めることが明らかになっている。さらにうつ病や不安障害では、労働生産性損失の半分以上がabsenteeism（欠勤による労働生産性の低下）やpresenteeism（出勤中の労働生産性低下）といった職場で発生する損失である。これまで精神障害の再燃や再発の危険因子については数多くの研究が実施されている。しかし、労働生産性低下に直結する精神障害の再休養の危険因子についてはこれまで十分に検証がされていない。そこで本研究では、日本における精神障害による休養歴のある労働者のどのような因子が再休養の危険因子になるか明らかにすることを目的とする。サンプルは、2009年4月1日から2012年3月31日までに、某製造業の企業で精神障害の休養から職場復帰を果たした194人。職場復帰から再休養に至るまでの期間を従属変数とし、独立変数として、性、年齢（復帰時）、入社時年齢、就業年数、診断、過去の休養回数、休養期間、職位を設定した。各説明変数の単変量解析をLog rank testで、多変量解析をCox比例ハザード解析で行い、再休養の危険因子の解析を行った。

単変量解析の結果からは、過去の休養回数（3回以上）が有意な再休養の危険因子となった。多変量解析の結果からは、年齢（復帰時）および過去の休養回数（3回以上）が有意な危険因子となった。年齢については、1歳年齢がふえることによる再休養のハザード比（95%信頼区間）は、0.923（0.866 - 0.984）であり、年齢が上がるにつれて再休養のリスクは低下することが明らかになった。過去の休養回数については、休養回数2回以下を参照カテゴリーとした際に、3回以上の休養歴のある労働者の再休養のハザード比（95%信頼区間）は、4.861（2.159 - 10.943）であり、2回以下と3回以上とを境に再休養のリスクが約5倍高まることが明らかになった。先行研究と同様に、本研究でも、年齢が低いことが再休養の危険因子であることが明らかになった。これには、若年で精神障害を発症した場合の脆弱性が反映されている可能性、選択バイアス（職場においては精神障害をわずらった労働者が退職しやすい）が関与している可能性が考えられた。また、過去の休養回数が増えると、再休養のリスクが著明に増加する点も先行研究の結果と一致するものであった。

今後、これらの再休養のリスクの高い群に対して効果的な介入が開発されることが望まれる。